

単元名「言葉で音楽をつくろう ～GarageBand を用いて～」

1. 目的・目標・評価規準

本題材では、これまで身に付けてきた拍や拍子、リズムに対する感覚やそれを表現するための能力を伸ばしていくことに重点を置いて学習を進める。題材を通して身に付けたい資質・能力は下記の通りである。

○リズムのつなげ方や重ね方の特徴について、それらが生み出すよさや面白さなどと関わらせて気付くとともに、思いや意図に合った表現をするために必要な、反復や変化などの音楽の仕組みを用いて音楽をつくる技能を身に付けている。【知識・技能(3)イ・ウ(イ)】

○言葉のリズム、反復、呼びかけとこたえを聴き取り、それらが生み出すよさや面白さを感じ取りながら、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考え、どのようにまとまりを意識した音楽をつくるかについて思いや意図をもっている。【思考力・判断力・表現力(3)ア(イ)】

○リズムのつなげ方や重ね方に興味・関心をもち、音楽づくりの学習に主体的に取り組もうとしている。【主体的に学習に取り組む態度】

2. 教科の本質と教材について

音楽には、主題(モチーフ)を展開させる技法がしばしば用いられる。主題の展開方法としては「逆行」「転回」「拡大」「縮小」など様々な技法があり、曲中ではこれらを組み合わせたり繰り返したりして用いられることがある。本題材では上記のうち、音価を倍に又は半分にする基本技法「拡大」と「縮小」を扱う。

本教材は、4文字の言葉を素材にしたリズムの音価を拡大・縮小させ、音楽の仕組みを生かしながら、それらの言葉のリズムを組み合わせる音楽をつくるものである。3人組で、テーマ・縮小・拡大をそれぞれ担当し、3つのパートをどのようにつなげたり重ねたりするかを試行錯誤できるようにする。同じ主題であっても音価によって感じ方が変化することや、それらを組み合わせることによる音楽の面白さなどを感じ取りながら、思いや意図をもって音楽をつくれるようにしたい。

〈ドレミの歌〉や〈この山ひかる〉では、拡大・縮小などの技法が用いられている。題材末にこれらの楽曲を歌唱し、音楽の構造を理解することによって、音楽の見方・考え方を働かせて音楽を表現したり楽曲を聴いたりする子供の姿が期待できるであろう。

テーマ	♪♪♪♪
縮小	♪♪
拡大	♪♪♪♪

3. 子供の実態(抽出児)と単元末に期待する本質を味わった子供の姿

本学級の子供たちは音楽科授業に意欲的であるが、音楽に関する習い事をしている子供は全体の2割程度と音楽経験の少ない子供が多い。よって、子供にとって身近である「言葉」を素材とした音楽づくりに取り組むことで、楽しみながら音楽の仕組みを捉え音楽をつくれるようにしたいと考えた。

1学期には、楽曲に使われているリズムに着目して歌ったり演奏したりする活動に取り組んだ。音楽づくりでは、4小節の旋律づくり、リズムを変化させることによる変奏曲づくりの経験があり、リズムの変化による曲想の変化の違いについて感じ取ることができている。本題材を通して、言葉がもつ語感や拡大・縮小することによるリズム(音価)の変化の面白さを味わえるようにしたい。抽出児を以下に挙げる。

A児… 前向きに取り組むものの、技能面で課題をもつ。反復や呼びかけとこたえなど、音楽の仕組みを用いて音楽をつくることで、音楽の構成を捉えながら表現する楽しさを味わわせたい。

B児… 音楽能力が高く、発想力もある。GarageBandをコミュニケーションツールとして、個人だけでなく、周りの仲間と協働し、リズムをつなげたり重ねたりするよさや面白さを感じ取る姿を期待している。

4. 本単元における教科の本質を味わうためのしかけ

本題材では、ICT機器を活用することで、子供の音楽技能を補うとともに音楽の知識・理解を確かなものとし、子供が試行錯誤しながら音楽表現を工夫できるようにする。

音楽づくりにおいて活用するiPad純正アプリGarageBandは、DTMを実現する無料のシーケンスソフトである。

音声録音が可能なこと、1ブロックを4拍分に設定できること、複数の声部を重ねることが可能なことから、本教材の音楽づくりに適していると考えた。本ソフトの活用により、直感的操作によって音楽の修正・改善が容易となり、つくった音楽の即時再現も可能となる。また拡大・縮小などの音価の違いや、音楽の構成が視覚化されるため、個々の音楽能力に左右されず、どの子供も試行錯誤しながらよりよい音楽表現を工夫する姿が期待できるであろう。

作品の分析や共有の際は、電子黒板を活用して楽譜を投影し、画面上に書き込んだり音楽の仕組みのスタンプを押したりする中で、音楽の構造を視覚的に捉えることができるようにする。

5. 学習の流れ（全4時間 本時 3/4）

本学級の子供たちは、総合的な学習の時間において和歌山の魅力を発信する取組を行っており、和歌山の特産品や伝統工芸、場所、人、歴史などに価値を見出している。よって本題材においては、和歌山をPRする4文字の言葉を素材とし、和歌山の魅力を発信する音楽をつくることとした。このような教科横断型のカリキュラム・デザインによって音楽科と他教科の学びとを関連付けることで、子供が必然性をもって音楽をつくれるようにしたい。

【音楽科】言葉で音楽をつくろう		
時	学習内容	評価
1	<u>リズムをのぼしたりちぢめたりしよう</u> ・4文字の言葉のリズムをテーマとし、拡大・縮小して即興的に表現する。 ・作品例を演奏しながら、それぞれのリズムのつなげ方や重ね方、使われている音楽の仕組みなど音楽の構造を分析する。	技 思いや意図に合った表現をするために必要な、反復や変化などの音楽の仕組みを用いて音楽をつくる技能を身に付けている。
2	<u>4文字の言葉を考え、拡大・縮小しよう</u> ・3人グループになり、和歌山をPRする4文字の言葉を一つ考える。 ・素材となる言葉を拡大・縮小し、GarageBandのブロックに音声を録音する。	知 リズムのつなげ方や重ね方の特徴について、それらが生み出すよさや面白さなどと関わらせて気付いている。
3 本時	<u>リズムのつなげ方や重ね方を工夫して、音楽をつくろう</u> ・録音したGarageBandのブロックを動かしながら、音楽の仕組みを用いて8小節の音楽をつくる。 ・GarageBand上で作品ができあがったら、声で演奏ができるか試してみる。 ・できあがった作品を発表し、互いに聴き合う。	思 言葉のリズム、反復、呼びかけとこたえを聴き取り、それらが生み出すよさや面白さを感じ取りながら、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考え、どのようにまとまりを意識した音楽をつくるかについて思いや意図をもっている。
4	<u>拡大・縮小を使った曲を歌おう</u> ・〈ドレミの歌〉、〈この山ひかる〉を歌い、それぞれ主題の拡大・縮小を見つけて歌う。 ・本題材の学習を振り返る。	態 リズムのつなげ方や重ね方に興味・関心を持ち、音楽づくりの学習に主体的に取り組もうとしている。

【総合的な学習の時間】
和歌山の魅力を発信しよう

6. 本時の目標

言葉のリズム、反復、呼びかけとこたえを聴き取り、それらが生み出すよさや面白さを感じ取りながら、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考え、どのようにまとまりを意識した音楽をつくるかについて思いや意図をもって音楽をつくることができる。【思考力・判断力・表現力（3）ア（イ）】

本時では、反復や呼びかけとこたえなどの音楽の仕組みを用いて、3つのパートを重ねて和歌山の魅力をPRする音楽をつくる。GarageBandのブロックを動かして、つくった音楽を再生したり修正したりしながらイメージに近づけようと吟味する中で、テーマを拡大したり縮小したり、それらを組み合わせたり重ねたりすることによる音楽のよさや面白さを感じ取れるようにする。

7. リフレクション

7. 1. 本実践と生徒エージェンシーの関わり

本実践では、生徒エージェンシーの発揮を可能にするための3つの要素のうち、③しっかりとした基礎力をつけることを軸に、②他者と協働しながら自分自身の学習プロジェクトや学習過程を改革する一人一人にカスタマイズされた学習環境、に取り組んだ。

音楽づくりとは、感性や創造性を働かせながら自分にとって価値のある音や音楽をつくる活動であり、既に存在する音楽を再現する活動とは異なり、一人一人の個性や発想力、多様性が担保されやすい。音楽づくりとエージェンシーの関係について、近藤（2022）は「子どもたちが自由な発想で楽器に向かい、それぞれの個性を生かしながら音楽づくりをする様子から『完成されていない』遊び心のある創造の空間に人間のエージェンシーが発揮できる要素があるのでないか」と述べている。このような音楽づくりの特性を踏まえ、本実践では、1.に示した「リズムと曲想との関わりに気付くとともに、音楽の仕組みを用いて音楽をつくる技能を身に付け、思いや意図をもって音楽をつくる」といった音楽科としての基礎力を育成しながら、生徒エージェンシー発揮の土台作りを行っていく。

7. 2. 抽出児の学び

ここでは、第3時の音楽づくりの過程における抽出児の姿や作品について述べる。

A児のグループでは、GarageBandのブロックを移動させて再生する等、ブロックの配置を何度も変更して試す姿が見られた。教師は、このグループの作品（図1）の「間（ま）」に着目し、「間は必要なの？」「間があるとどんな感じがする？」と問いかけたり、「繰り返しを使うことで、次いつかなってワクワクするね」と表現を価値付けたりした。そのことよって、子供たちは自分たちの作品がもつ新たなよさや面白さに気付くことになる。それをきっかけに、作品をつくる際の工夫点を言語化しようと、グループでの対話が活発になり、それまで発言の少なかったA児が、反復を使うことのよさについて積極的に発言する姿が見られた。

C：繰り返しを使うと、よく伝えられる。
C：同じテンポ（繰り返し）なんだけど、間をつくる。すると、よく伝わってはまる。飽きない。
C：間をつくることで、いつ始まるんだろう！？もう終わりかな！？ってドキドキさせる。何回もループして、いつになったら終わるの！？みたいなの。
C：ドキドキ感ね。
C：止めないと終わらない！みたいなの。
C：なんていうんだろう？はまる。癖になる。
C：なんか癖になるよね、これをずっと聴いていたら。
C：はまるな～。

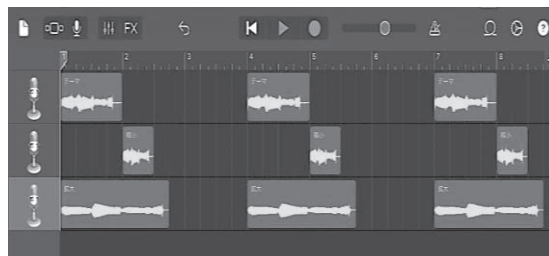


図1 A児らの作品



図2 B児らの作品

上記の発話記録では、「間」や音楽の仕組み「反復」を使うことの効果について、「はまる」「飽きない」などといった子供自身の言葉で表現しようとしており、対話を通して自らの作品を分析的に省みていることがわかる。また、思いや意図の自覚化や明確化が促され、自分たちのつくっている作品に愛着を感じ始めている。この間、作った作品を何度も再生して聴き返す姿が見られた。A児の振り返りでは、「くりかえしを使うのがいいことに気付いた」と反復を使うことのよさに関する記述が見られた。

B 児らのグループからは、テーマ・拡大・縮小だけでなく「縮小よりももっと短いリズムを作りたい」というアイデアが出た。テーマの4分の1の音価（16分音符）となることをリズム譜で確認したうえで、このリズムを「超縮小」と名付けた。「超拡大もできるけれど、つくりたい曲にはどちらが必要なのかな？」と問うと、「楽しい感じの音楽にしたいから、超縮小を使いたい」と言い、GarageBandにて縮小ブロックを2分の1倍にし、B 児が率先して超縮小ブロックを追加していた（図2）。「超縮小を使うとおもしろい。弾む。楽しい感じになる」と対話したり、つくった音楽を再生しながら、グループの仲間で互いに笑みを浮かべたり、「これ、いいね」「いい曲ができたね」と価値判断したりするなど、グループの仲間と音や音楽によるコミュニケーションを図りながら音楽をつくる姿が見られた。

7. 3. 考察とまとめ

抽出児の学びを基に、7.1.で述べた「リズムと曲想との関わりに気付くとともに、音楽の仕組みを用いて音楽をつくる技能を身につけ、思いや意図をもって音楽をつくる」力が育成されたかについて考察を行う。

7.2.で示したように、子供たちは4文字の言葉を録音した GarageBand のブロックを移動させながら、多様な組合せ方や重ね方を試すとともにそのよさや面白さに気付くことができていた。また、即時再現機能によって自身の表現をモニタリングしながらよりよい音楽表現を追求しようとする姿が見られた。このような姿から、ソフトウェアの選択は、本授業実践の目標達成に適切であったと考えられる。しかしながら、ブロックを移動させるだけで音楽ができる直感性の高い活動であったことから、子供たちはティンカリング（いじくりまわす中で発想を得ていくという、創造的思考を引き出すための活動）によって、最初はほぼ無自覚的にブロックを組み合わせた重なり、音楽の仕組みを用いたりしていた可能性がある。しかし、思考を促したり表現を価値づけたりする教師の言葉がけや、グループ内や学級全体での協働的な学びによって、思いや意図を自覚化したり明確化したりすることにつながった。その結果、7.2.に示したような「繰り返しを使うとよく伝わる」、「間を使うことでいつ始まるんだろうとドキドキ感が生まれる」、「超縮小を使うとおもしろい。弾む。楽しい感じになる」等といった発言が引き出され、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考え、思いや意図をもってまとまりのある音楽をつくらうとする姿が見られた。

また第4時では、音楽づくりでの学びを生かし、テーマの拡大や縮小が使われた楽曲を歌唱した。曲のどの部分にテーマの拡大や縮小が使われているのかを探る中で、「知っている曲にも拡大が使われていることに驚いた」、「他の曲にも使われているのか探してみたい」という発言があり、テーマを拡大したり縮小したりすることのよさや面白さをより実感するとともに、拡大や縮小といった作曲の基礎技法について実感を持った理解を促すことができ、子供にとってより汎用的な学びとなったと考えられる。

以上のように、子供たちはどのような音楽をつくるかといった目的意識をもち、そのイメージした音楽に近付けるためにはどうすればよいのか、音楽の見方・考え方を働かせた自己調整を行うなど、思考と試行を繰り返しながら創造的に音楽をつくらうとしていた。その過程で教科の本質を味わうことができ、さらに教科横断的なコンピテンシーである「新たな価値を創造する力」の育成にもつながったと考えられる。

このような経験は自己有用感の高まりや生徒エージェンシーの発揮につながるとともに、仲間と協働して作品をつくる楽しさを味わったり、自分たちの作品のよさや面白さを共有したりすることは、共同エージェンシーの発揮へもつながる可能性があるであろう。子供の発想力や創造性、個性を認め合う音楽づくりの活動を今後も積み上げ、エージェンシー発揮とのつながりについて研究を深めていきたい。

参考文献

近藤真子 (2022) 「音楽づくりの教育的可能性と社会への広がり：エージェンシーの発揮と連鎖」、『文教大学教育研究所紀要(30)』 pp.61-70